

国際教育研究フォーラム

目次	頁
グローバルこどもサポートセンターの開設に寄せて	小山悦司 1
SF のバベルの塔を超えてー中国 SF 雑誌『世界科幻動態』の挑戦ー	楊 霊林 2ー 8
キャンパスの国際化を推進する留学生と日本人学生の交流促進の試み	前川洋子 9ー14
編集後記	14

グローバルこどもサポートセンターの開設に寄せて

国際教育研究所所長 小山 悦司

公益財団法人・橋本財団（岡山市北区幸町）は、2025 年 4 月に「おかやまグローバルこどもサポートセンター」を開設した。外国にルーツがある岡山県内の児童生徒らを対象にした総合支援窓口として、さまざまな役割を果たすことが期待されている。地域で暮らす外国人が増える中、日本語指導が必要な児童生徒らに集中的に語学などを教え、保護者の居場所づくりにも対応するなどして、適切な日本語指導と支援の強化に取り組む。

語学指導は、小中高生の進学指導塾などに委託。日本語が話せない就学前の子どもに言葉を集中指導するプログラム、高校受験に備える放課後日本語教室などを行うほか、オンライン学習にも対応する。財団は 2023 年から、外国にルーツのある子どもを対象にした無料学習塾を試験的にいき、11 か国計 42 人（6～18 歳）の声を踏まえて対応領域を拡大し、メインの語学プログラムに関しては短期集中指導形式などを取り入れて充実させた。

財団は「人口減少が進む中、外国人材の受け入れ環境が地域の浮沈を左右する。センターの活動を通し、外国人に選ばれる環境づくりを支えたい」としている（山陽新聞「外国ルーツの子支援」2025 年 4 月 15 日）。”外国人に選ばれる岡山”を実現させるために、在留外国人の増加を見越してのセンターの開設は、画期的な取組みとして注目されてよい。

在留外国人数は 2024 年 12 月末に 377 万人と過去最高を記録し、新たな在留資格の創設により今後もさらなる増加が予測される。それに伴い、外国ルーツの子どもたちが年々増加する中で、日本語指導が必要な児童生徒への対応が対症療法的な支援に留まっているとの声も多い。日本語指導が必要な児童生徒は、2023 年時点で合計 69,123 名在籍している（文部科学省「外国人児童生徒等教育の現状と課題」2025 年 4 月）。在籍数は上位から、愛知県（13,984 名）、神奈川県（8,589 名）、東京都（6,312 名）と続き集住地域の代表とされる。一方、岡山県は 252 名と散在地域に区分されているが、増加率は年々高まっている。集住と散在化が同時並行で進みつつある現在、適切な日本語指導と支援の強化が今まさに求められている。

岡山県は「岡山県外国人相談センター」、岡山市は「外国人総合相談窓口」を設置し、各種相談を実施している。今回の「おかやまグローバルこどもサポートセンター」の開設により、自治体と民間がタッグを組んで草の根まで網羅的に子どもたちを支援することができれば、誰もが暮らしやすい多文化共生の持続可能な地域づくりにつながるのではなかろうか。

SF のバベルの塔を超えて —中国SF 雑誌『世界科幻動態』の挑戦—

岡山理科大学 楊 靈琳

2015 年、中国 SF 作家である劉慈欣（1963-）は、代表作である『三体』（2006）により SF 界のノーベル賞とも称されるヒューゴー賞をアジア人として初めて受賞した。この受賞によって、中国 SF は世界文学の舞台にその存在を強く印象づけることになった。また同時に、中国国内でも SF に対する関心が高まり、日本や韓国といった近隣諸国をはじめ、世界の SF に関する情報を知りたいという声が広がっていった。

こうした背景のもと、中国では国家レベルの SF 関連雑誌『世界科幻動態』が創刊された。

『世界科幻動態』は SF 小説を掲載する雑誌ではなく、世界中の SF に関する最新情報を収集し、中国語に翻訳したうえで、中国の読者に向けて発信することを目的としている。つまりこの雑誌は、言語の壁 — 言い換えれば「バベルの塔」 — を越え、世界の SF 業界の動向を捉えようとする試みなのである。

この雑誌は、どのような情報を中国の読者に届けているのか。また、SF の発祥地とされる欧米圏の SF 文学や SF 映画などの情報のみ紹介しているのか。そうした問いに答えるために、筆者は特任編集委員の一人として、中国の SF 関連雑誌『世界科幻動態』を詳しく紹介してみよう。

1. 『世界科幻動態』の概観

『世界科幻動態』は、2021 年に中国科普研究所および中国 SF 研究センター（中国科幻研

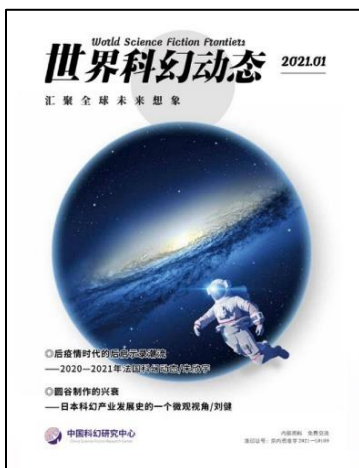


図 1

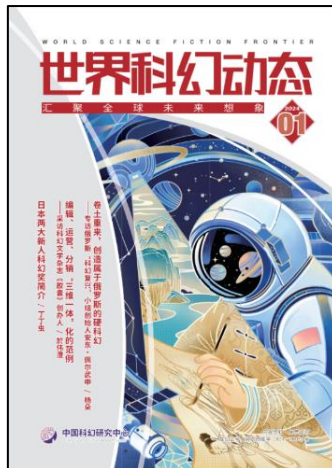


図 2

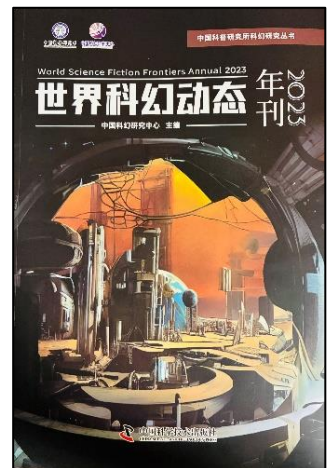


図 3

究中心)によって創刊されたものである。2021年から2022年までは月刊として発行されていたが、2023年より季刊に変更された。また、毎年年末には年刊1冊を発行し、その年に掲載された記事をまとめている。図1は創刊号の表紙、図2は2024年第1期(季刊)の表紙、図3は2023年の年刊表紙である。

1.1 創刊号にみる編集意図と国際的視点

創刊号の「巻頭辞」に、該当雑誌の創刊目的が、明白に書かれている：『世界科幻動態』は、中国の国内外のSF界における発信のプラットフォームおよび学术交流の架け橋となることを目指している。世界各地の最新動向やSF産業の発展に関する考察、分析が『世界科幻動態』を通じて紹介、共有されることで、SFの発展に関心を持つ多くの中国人にとって、世界を理解するための重要な窓口となることが期待される。さらに、『世界科幻動態』においては、SF小説、SF映画、SFゲーム、SF教育などを主題とした国際的な議論が自由に展開される場となることを志向している¹。

要するに、最先端の世界のSF情報を中国の読者に届けることが、根本的な目的であると考えられる。その際、SF小説に限らず、映画、ゲーム、アニメーションなど多様なメディア形態に対しても積極的に目を向けようとする姿勢が見受けられる。その点は、創刊号の内容からもうかがうことができる。

創刊号においては、日本およびフランスにおけるSFの動向が紹介されている。

日本については、最新のSF小説やアニメ作品ではなく、SF産業に関わる特撮映像制作会社である株式会社円谷プロダクションを取り上げた文章が掲載されている。同社は、「特撮の神様」と称される円谷英二(1901-1970)によって設立されたものであり、高度な特殊撮影技術を駆使した映像作品の制作で広く知られている。『ウルトラシリーズ』をはじめとする多数のテレビ番組や映画を手がけており、「ウルトラマン」などの作品は、日本のSF産業、特にその商業的なビジネスモデルの構築に深い影響を与えてきた。当該文章は、円谷プロダクションの発展過程を整理し、日本のSF産業に対する影響を分析したものである²。

フランスに関しては、コロナ禍が同国のSF小説にいかなる影響を与えたのかについての考察が示されている³。

創刊号に掲載されたこれらの内容からすると、『世界科幻動態』はアジアにとどまらず、

¹ 王挺「汇聚全球未来想象，搭建世界科幻交流平台」『世界科幻動態』創刊号、2021.01、pp.1

² 劉健「円谷制作的興衰——日本科幻産業発展史的一个微觀視角」『世界科幻動態』創刊号、2021.01、pp.19-17

³ 朱欣宇「後疫情時代の後啓示録潮流——2020—2021年仏国科幻動態」『世界科幻動態』創刊号、2021.01、pp.6-9

世界各地における SF 関連のあらゆる情報を積極的に収集、発信していると考えられる。

1.2 雑誌の仕組みとコラム紹介

『世界科幻動態』は 2021 年の創刊以来、英語、日本語、韓国語、ロシア語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、アラビア語といった約 8 言語、26 か国にわたる SF 関連情報を収集

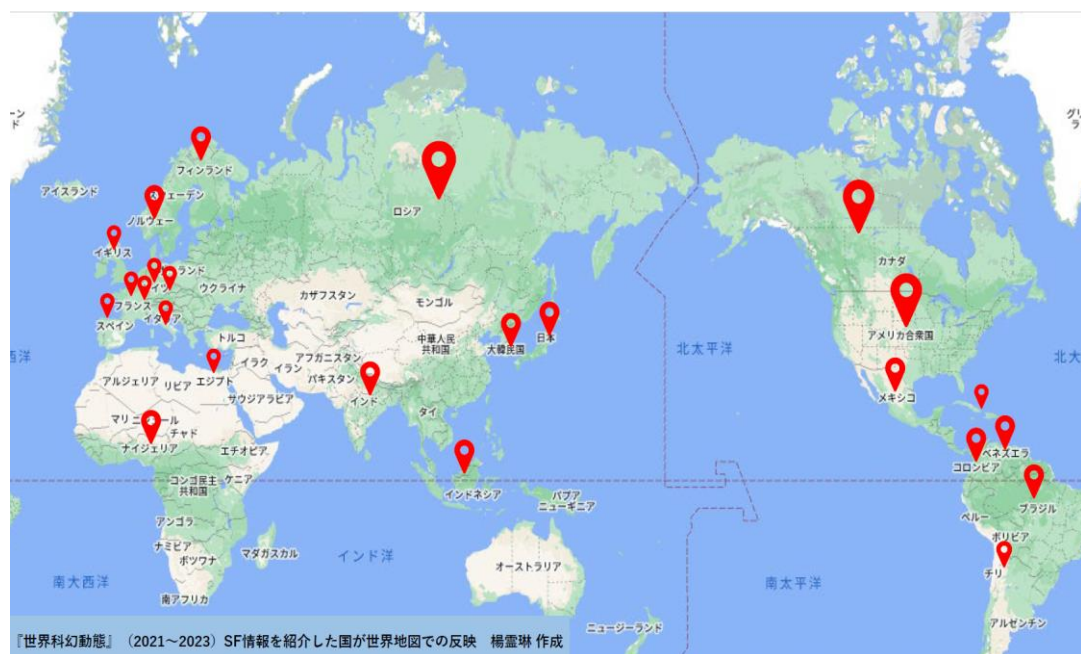


図 4

している（図 4）⁴。欧米諸国はもとより、コロンビアやエジプトといった、通常あまり SF の話題で取り上げられることの少ない国々の情報も含まれている。

このような膨大な情報を収集するにあたっては、各国で活躍する中国の SF 研究者の協力が不可欠である。彼らの中には、各国で SF を研究している留学生もいれば、現地の大学で教鞭を執っている研究者も含まれている。彼らは現地の SF 関連情報を収集し、各言語から中国語へと翻訳した上で、『世界科幻動態』に寄稿している。こうした体制により、各国の最新 SF 情報が迅速に中国へと届けられ、言語の壁も効果的に乗り越えられている。

勿論、一方的に中国以外の国々の SF 情報を中国に輸入するだけでなく、中国の SF 作品が他国でどのように受容されているかの紹介にも力を入れている。こうした双方向性の考えに基づき、『世界科幻動態』の主なコラムは「各国巡礼」、「出海観察」、「人物專訪」、「SF 産

⁴ 図 4 は、Google マップに基づき筆者が作成したものである。

業」⁵などで構成されている⁶。

それらのコラムの中でも、特に注目すべきは「各国巡礼」である。本コラムでは、アフリカやエジプトといった、通常あまりSFの文脈で取り上げられることの少ない地域に焦点を当て、そのSFに関する情報を積極的に紹介している。

たとえば、2023年第1期に掲載された「シリウスの呼びかけ：ノンモ賞からアフリカ未来主義へ」⁷（図5）という文章では、未来に関する言説の実践に長らく欠如していたアフリカに注目している。さらに、アフリカ推想小説協会（African Speculative Fiction Society, ASFS）が主催する、2017年創設の文学賞・ノンモ賞（Nommo Award）の歴史や、「アフリカ未来主義」という概念についての整理が行われている。

その文章によれば、1990年代に「アフrofuturism」という言葉が誕生したものの、それは主にアフリカ系アメリカ人作家により描かれた未来表象を指すものであり、アフリカ本土の視点とは一線を画していた。これに対し、2019年に提唱された新たな概念「アフリカン

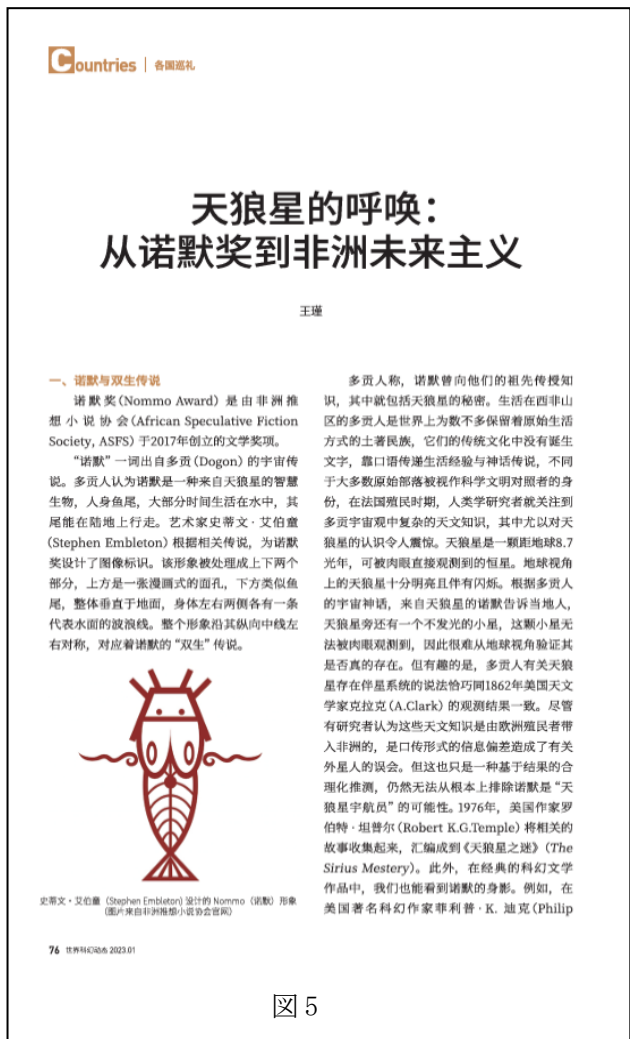


図 5

⁵ 「各国巡礼」は、諸外国におけるSFの近年の状況を紹介するものであり、「出海観察」は、中国のSF作品が海外で翻訳・紹介される現状を伝えるものである。「人物專訪」では、諸外国のSF作家、翻訳者、編集者などへのインタビューを掲載している。「SF産業」は、諸外国のSF小説だけでなく、SF映画、アニメ、ゲームなど、SFと関連する各種産業の紹介を行うものである。

⁶ 編集方針により、コラムの構成は年度ごとに多少変更される可能性がある。

⁷ 王瑾「天狼星的呼唤：从诺默奖到非洲未来主义」『世界科幻動態』2023.第1期、pp.76-80

フューチャリズム (Africanfuturism)」は、アフリカ本土から未来を語ろうとする試みとして位置づけられており、アフリカにおける独自の未来言説の展開がここから本格的に始まったことが明らかにされている。

要するに、『世界科幻動態』は、我々がよく知る欧米という SF 発祥地の情報にとどまらず、これまで未来に関する言説の場から長らく欠落していたアフリカにも視野を広げている。これにより、『世界科幻動態』は、各国・地域の作家が描く未来像を収集し、SF 業界に対して人類全体が描き出す未来の社会像に関する情報を提供するという、広い視野を持っていることがうかがえる。

2. 日本 SF の紹介

『世界科幻動態』は創刊以来、近隣諸国である日本の SF 情報を積極的に収集し、中国の SF に関心を持つ人々に紹介している。

筒井康隆の『時をかける少女』を中国語に翻訳した、中国 SF 界で高い影響力を持つ翻訳

世界科幻動態

上原香：
成都世界科幻大会参加记

〔日〕上原香 著
杨典雄 译

2023年10月18日至22日，我参加了在成都举行的世界科幻大会。

由于新冠疫情的原因，这是我自2019年以来首次来到成都。亦是疫情后首次来到中国。为了能够参加这次大会，我更是付出了前所未有的努力。我任教于日本的一所大学。我们学校，一般学期内是不允许出国的，因此，我必须提前几个月向学校提交出差的申请，以便获取批准。此外，以前适用于日本国民的15天以内免签的政策已经暂停了，因此我在出行前两个月就得在网上向中国签证服务中心预约“签证申请”。在等待了大约一个月以后，终于可以前去办理签证申请手续了。几天后，我必须再次回到中国签证的服务中心，去获取签证。这样，才最终获得了通往中国的签证。在办理中国签证的过程中，我觉得中国似乎离我越来越远了。因此，之后能在中国成都再次见到阔别四年的友人 and 熟人，并结识新的朋友，对我来说，是无比的激动与珍贵。

10月18日，我来到成都后第一时间前往参观了会场。因为这是首次在中国举办世界科幻大会，所以在“科幻之都”成都，修建了一座科幻馆。成都科技馆由扎哈·哈迪德建筑事务所设计，是一座将宇宙空间与未来完美融合的艺术建筑物，其优美的曲线让人叹为观止。馆内的各个会议室以太阳系中的行星命名，给人一种肉体的感觉。馆内入口处是一个穿着宇航服的熊猫吉祥物“科梦”（Kormo）的塑像。“科梦”的各种商品几乎随处可见。我想也买一个那发光的小型像的，但大会开始没几天，我的书和杂志就已经装满了整个行李箱，实在是没有多余的空间留给科梦了。可是，如今已然回到日本，在写这篇文章的时候，我却十分后悔当初为什么没有为科梦挤出哪怕一点点的空间。真的应该买一个小科梦的！11月18日，在《科幻世界》李阳怡女士的安排下，我有幸与其他同样来自日本的嘉宾一同参观了《科幻世界》杂志社。对我来说，这简直就是一次朝圣之旅。我在《科幻世界》杂志社的标志招牌前拍照留念了。当晚，举行了成都世界科幻大会的开幕式，场面尤为壮观。我至今仍记忆犹新。演出的节目中，既有传统川剧的变脸，亦有展现多样性的现代舞，以及以未来为主题的魔术。但最令我难忘的还是为成都世界科幻大会的开幕式专门创作的主题曲《遇见未来》。这首歌由许多孩子一齐登台演唱，由此展现出了这次大会成功的背后有着许许多多人的努力。“乘着风遇见未来，并着穿越越天外”“灯火通银河，时光耀时代千奇万想梦”——这是一首充满梦幻的歌曲，让人感受到了时空的无限膨胀。

10月19日，我有幸与同为日本嘉宾的立原透耶老师，以及中国友人任冬梅女士一起参观了董仁威老师（世界华人科幻协会监事长）的办公室。在董老师办公室的书架上，摆放着许多与科幻小说有关的藏书。我送给董老师一本《移动迷宮》，这是我与立原老师一同参与翻译的

世界科幻動態 2023.04 27

図 6

Editorial views | 人間専攻

聚焦《亚洲科幻特辑》
——日本《SF杂志》编辑部专访

譯編

2022年6月，日本老牌科幻杂志《SF杂志》（『SFマガジン』）以中韩科幻为中心，重磅推出了《亚洲科幻特辑》（『アジアSF特集』），又一次引发了日本科幻爱好者对中国科幻的关注。

日本《SF杂志》创刊于1959年12月，由早川书房出版，是日本最著名且历史最为悠久的科幻杂志，亦是日本当今科幻杂志中唯一的双月刊，为战后日本科幻发展立下了汗马功劳。同时，作为一座不可或缺的桥梁，它为各国科幻作家、评论家提供了与外界沟通和交流的平台，源源不断地向日本本土科幻介绍海外优秀科幻作品。笔者在此简要介绍一下日本《SF杂志》的创刊背景。该杂志创刊之初，以海外科幻杂志《奇幻与科幻杂志》（The Magazine of Fantasy & Science Fiction）为模板，主要刊登欧美科幻小说，开拓潜在读者。1960年2月的创刊号收录了菲利普·K·迪克（Philip K. Dick）、艾萨克·阿西莫夫（Isaac Asimov）、亚瑟·查理斯·克拉克（Arthur Charles Clarke）等科幻名家的作品。随后，首任主编福岛正实（ふくしま じさつ）提出日本《SF杂志》不能甘做海外科幻杂志的翻版，而是要日本本土科幻小说、科幻非虚构作品两手抓。为了发掘更多新人作家，该杂志于

1961年主办了第一届“空想科学小说大奖”（1974年改名为“早川SF大奖”）。该奖项的设立为日本科幻界输送了一代又一代的优秀作家，例如小松左京（こまつ さきょう）、筒井康隆（つづい やすたか）、神林长平（かんばやし ちやうへい）等。2019年《三体》日译本出版，日本《SF杂志》以此为契机，顺势推出了多部中国科幻特辑，如2019年8月号的《〈三体〉与中国科幻》（『「三体」と中国SF』）、2020年12月号的《中国科幻特辑》（『中国SF特集』）。得益于日本《SF杂志》这一平台，越来越多的日本读者开始了解除《三体》以外的中国科幻小说。时隔两年，日本《SF杂志》重磅推出了《亚洲科幻特辑》（2022年6月号），这也是尚口力丸（みぞり きるまる）就任主编以来，第一次挑战如此宏大的主题。本次特辑主要介绍了宝树《三体X：观想之宙》的日译本《三体X 觀想之宙》的序言，其单行本译者为大森望（おおもり のぞみ）、光吉曜（みつよし さくら）、湾村（わん・ちやい）。于2022年7月由早川书房出版。另外，该特辑还刊登了韩松的《让我下天去》（日译版标题为『我々は書き続けよう！』）和昼温的《星星是如何相连的》（日译版标题为『星々のつながり方』），译者分别为



杂志的出版形式为：《SF杂志》月刊有纸版、《SF杂志》月刊有电子版、《SF杂志》中国科幻特辑有电子版、《SF杂志》亚洲科幻特辑有电子版（提供共读版由山田国男提供）

図 7

者である丁丁虫は、日本の優れた当時の新作、中井紀夫の『山の上の交響曲』⁸（2021）、新城カズマの『月を買った御婦人』⁹（2021）、小田雅久仁の『残月記』¹⁰（2021）などを積極的に紹介し、書評を執筆している。

また、日本の SF 作家および研究者からの寄稿や協力も数多く得られている。例えば、「三体」シリーズの翻訳者の一人である上原かおりは、2023 年成都で開催された世界 SF 大会に参加した後、特任編集委員である筆者の招請により、「成都世界 SF 大会参加記」¹¹を寄稿した（図 6）。また、1959 年に創刊された日本で最も著名な SF 雑誌『SF マガジン』の編集長である溝口力丸の協力により、2022 年 6 月号で特集された『アジア SF 特集』の発行に関し



図 8



図 9

⁸ 丁丁虫「奇想交響曲——簡評『山之上的交響曲』」『世界科幻動態』2021.第4期、pp.26

⁹ 丁丁虫「从輕小説到科学幻想——簡評 SF 小説集『買月亮的貴婦人』」『世界科幻動態』2021.第12期、pp.27-28

¹⁰ 丁丁虫「月昂者的人生伝記——簡評小田雅久仁『残月記』」『世界科幻動態』2022.第10期、pp.24-25

¹¹ 上原香「成都世界 SF 大会参加記」『世界科幻動態』2023.第4期、pp.27-29

て、『SF マガジン』の編集部へのインタビューを実現することができた¹²（図7）。そのほか、日本の著名な SF 作家である小川哲（図8）、陸秋槎へのインタビューも掲載された¹³。さらに、「三体」シリーズの日本語版における解説や紹介を通じて、その普及に大きく貢献した大森望へのインタビューも掲載されている（図9）¹⁴。

これらの文章が掲載されたことから、日本の SF 界においては、作家から評論家に至るまで、SF に関心を持つ人々が国際的な SF 交流に対して非常に熱心であることがうかがえる。

3. 終わりに

本稿では、中国の国家レベルの SF 関連雑誌『世界科幻動態』に注目し、その創刊の背景と、どのような情報が中国の読者に向けて発信されているのかを概観した。その特徴として、欧米圏に限らず、近隣諸国である日本や韓国をはじめとするアジア諸国、さらに SF の文脈であまり取り上げられていないアフリカ地域の SF 動向までも積極的に紹介している点が挙げられ、中国 SF 界における国際的な視野と交流への意欲が明らかとなった。さらに、限られた言語圏の枠にとどまらず、新たな挑戦として敢えて「バベルの塔」を超えて、多様な言語で語られる人間社会の未来像に対する関心も見て取れる。

『世界科幻動態』は、SF 小説そのものではなく、SF に関する世界の動きを伝える「メタ的」なメディアとして、言語と文化の壁を越えた架け橋の役割を担っている。これは、世界 SF の中心が多極化しつつある現在において、特に重要な意味を持つと考えられる。

今後は、このような媒体を通じた情報流通が、中国 SF のさらなる発展と国際的な共鳴を生み出す契機となるだろう。また、日本や他のアジア圏における SF 情報発信のあり方についても、比較の観点から検討する余地が残されている。

¹² 陳瑤「聚焦『亞洲科幻特輯』——日本『SF 杂志』編集部專訪」『世界科幻動態』2022.第 7-8 期、pp.34-36

¹³ 『SFG』編集部作、科幻光年記「小川哲的科幻觀——日本科幻作家小川哲訪談」（「小川哲の SF 觀——日本 SF 作家・小川哲へのインタビュー」）『世界科幻動態』2022.第 11-12 期、pp.18-21（初出は『SFG』2021 年第 3 期である。）

陳瑤「推理与科幻，探索知性与非理性的碰撞——對話旅日作家陸秋槎」『世界科幻動態』2023.第 3 期、pp.76-79

¹⁴ 丁丁虫「為科幻創作注入新鮮血液——專訪日本科幻翻譯家、評論家大森望」『世界科幻動態』2023.第 4 期、pp.54-60

キャンパスの国際化を推進する留学生と日本人学生の 交流促進の試み

岡山理科大学 グローバルセンター 前川 洋子

はじめに

岡山理科大学では、岡山理科大学ビジョン 2026 の 3 において、「世界から人々が集い、国際性豊かな人材を輩出する大学」を掲げており、アクションプランとして「①国際化推進体制の構築、②学生のグローバル体験の充実、③国際性をはぐくむ教育環境の整備」が挙げられている。これら 3 つのアクションプランのうち①国際化推進体制の構築の基盤として、「キャンパスの国際化を推進するための拠点」になるべく 2022 年から今まで分散されていた事務の 3 部門（学生課留学生担当、留学生別科担当、グローバル教育支援課）を統合してグローバルセンターが設立された。この統合により、グローバルセンターには日本人学生、留学生、留学生別科生が集うようになり、それぞれが顔を合わせる機会は増えたが、相互に関わりながら互いを尊重するような真の国際化には時間が要すると思われる。

現在、岡山理科大学には学部、大学院、留学生別科、非正規生を合わせて 240 名前後の留学生在籍している。日本の生活になじんで日本人学生と友人関係を築いている者もいるが、日本人学生と友達になることに困難を感じる者、同じ国出身の学生とのみ交流する者、母語でない日本語での学習に苦労している者も多くいる。更に、日本人学生の国際交流に目をむけてみると、国際交流や国際化に関心を持って積極的に国際交流イベントに参加する者はごく一部であり、国際交流に関心を持ってはいるが英語をはじめとした言語能力が必要であるとの思い込みと共に言語能力への自信の無さから留学生との交流に消極적인傾向が強いように思われる。岡山理科大学グローバルセンターは、留学生別科生を含む留学生と日本人学生が互いにメリットを感じながら、より頻繁に交流する機会を作り出すことで、留学生は本大学や日本での生活により深く溶け込むことができ、日本人学生は国際的な関心を持ち学内外で他国の人とより積極的に交流する意識を持てるようになる環境を整えることを目的として、岡山理科大学教育改革推進事業に応募し、キャンパスの国際化を推進する取り組みを行うことにした。

1. これまでの取り組みと課題

先述したように、グローバルセンターでは、語学学習支援や国際交流をはじめとした様々なイベントや活動を提供してきた。

学生のグローバル活動を推奨する取り組みとしては、岡山理大グローバル活動認定証を作成し、就職活動などで使用できるよう在学中のグローバル活動を証明することも始めた。この岡山理大グローバル活動認定証は、国際交流イベントやグローバルセンターが提供する語学プログラムへの参加などを活動にかかる時間やエネルギーの負担に応じたポイントと、活動を通して学生が修得できるスキルバッジの2軸を用いて累積評価することで、学生も証明書を見た企業も当該学生の在学中グローバル活動への参加をスキルとエフォート両面で振り返ることができるように作られたものである。

また、グローバルチャレンジという学生による自主的な国際的活動の取り組みを経済的に助成する制度もあり、学生が国外で学びを深めるために行うグローバルな活動及び、国内で学生が主体となって計画する国際交流イベントのようなグローバルな活動を助成している。

しかし、これらについて様々な機会で宣伝しているが、周知が進まず参加する学生が限られているということが現状である。グローバルセンターでは教育改革推進事業を用いて学生の国際的活動への関心を高め、キャンパスの国際化促進を図っていくために、①学生同士の助け合いの制度化、②外部施設での国際交流イベント開催を計画した。

2. 学生同士の助け合い制度化の必要性

留学生や留学生別科生は日本語力不足による生活面・学習面での困難を抱えており、グローバルセンターや学科が支援を試みているが、教職員のみで継続的な支援を行うには人手不足が大きな課題となっている。学習面については日本語だけでなく、専門教科を学ぶ際の数学の基礎知識などへの支援も必要であり、支援体制の整備が急務となっている。また、筆者が留学生別科長として学生と関わる経験から、留学生別科生が岡山理科大学を始めとした4年制大学へ進学するためには、日本語教育だけでなく入試に備えた数学の学びが重要であることも明らかになってきた。

このような留学生や留学生別科生が抱える問題に日本人学生が関わることで、同世代だからこそ分かりあえる悩みやニーズに合った支援を行うことが可能になると思われる。また、国際交流に関心のある日本人学生が日本語を用いて留学生への支援を行う機会を設けることで、留学生と日本人学生の距離が縮まり、互いへの理解が深まると考えられる。

具体的な制度としては、①日本人学生による留学生別科生への数学・理科補習授業、②留学生への生活及び学修支援パートナーマッチング制度、③留学生による日本人への語学学習支援パートナーマッチング制度、④日本人と留学生の専門学習バディ制度、⑤留学生対象日本語授業における日本語学習支援バディ制度を考えた。2024年度は中でも①を実施することができたため、その取り組みについて紹介する。

3. 取組1：留学生別科生数学補習授業（数学サポーター）

本取組は、留学生別科生への大学入試支援として、理科や数学の基礎を教える補習授業の必要性を実感したことから開始した。本取組以前にも、留学生別科生の受験結果から数学教育の重要性を確認し、グローバルセンターに所属する複数教員が限定された時間ではあるが補習授業を行うことがあった。しかし、教員の時間や準備の負担を考えると継続して一定の質と時間を用いた補習授業は困難であることも判明した。そこで、岡山理科大学には教員を目指す学生が多いことも考え、2024年5月に教職を目指す学生を対象として有償で留学生別科生への数学サポーター募集を開始した。

数学サポーターには応用数学科や生物数学科といった留学生との交流に関心がないと思われる理系学生8名の応募があった。補習授業を受講希望した別科生は最大18名おり、補習授業の開始前、グローバルセンターの数学教員が行った留学生別科生のレベル判定テスト結果に応じたレベルに分かれて、6月から3月にかけて全32回の授業があった。

本授業について、数学サポーターへの事後アンケート（回答者6名）の結果(図1)からは、1名が「大変だった」と答えたが、全員が「良い経験だった」と肯定的な感想を持ち、「自分の勉強になった」「楽しかった」と考えていることが分かった。また、「数学サポーターを今後も続けたいと思いますか」という質問(図2)に対し、半分の3名が「ボランティアでも続けたい」と回答し、卒業する1名を除いた全員が継続する意思を持っていることが分かった。実際に、1月～3月にかけて岡山理科大学への進学が決定した別科生への補習授業をボランティアで行ってくれた学生もいた。記述での感想には、ICTを用いた実践的な授業準備の経験、国による既習事項の違いの認識、分からない学生に教えることの難しさと楽しさ、異文化への理解、留学生との距離感の変化について述べられており、留学生別科で教えることで新たな知見を得ている様子をうかがうことができた。本取組は継続していけば、教員を目指す学生に実践の場を提供しながら、国際交流や異文化理解に興味がない学生の見識を広げる助けになると期待できる。

1. 数学サポーターの経験はいかがでしたか。
6件の回答

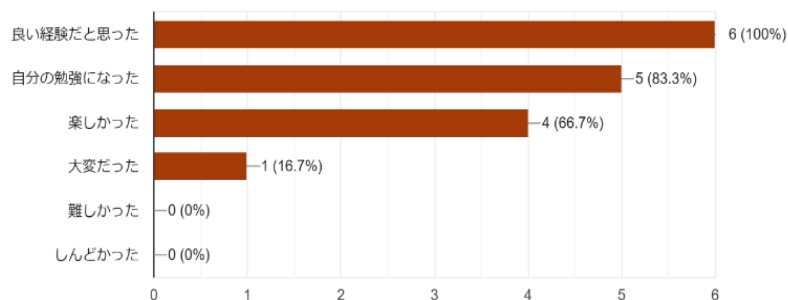


図1 数学サポーターの反応

6. 今後、数学サポーターを続けたいと思いますか。

6 件の回答

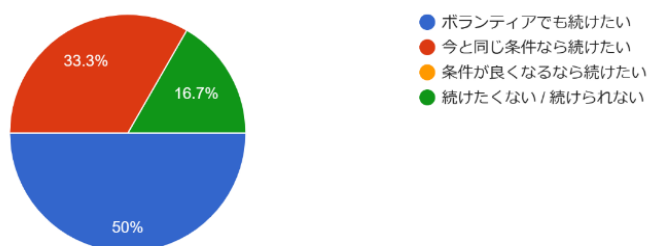


図 2 数学サポーターの反応 2

また、留学生別科生への事後アンケート（回答者 7 名）の結果からは、7 名全員が数学補習授業は「入試に役立った」「日本人学生と交流するきっかけになった」と答え、5 名が進学意欲を高めたと回答した。自由記述の中では、「分かるまで例を出して何度も教えてくれた」「日本語で数学の勉強が出来て役に立った」「説明が分かりやすかった」というコメントがあり、別科生にとっても交流の良い機会を持て、進学支援という当初の役割も十分に果たした。

4. 取組 2：留学生と日本人学生の交流プログラム（文化と学びの交差点）

本取組は、留学生と日本人学生が交流するプログラムとして、留学生別科生の学修成果発表会と同時開催の形で、異文化理解について学内外の人を交えて学ぶことを目的とし、「文

化と学びの交差点」と題したイベントを能楽堂ホール tenjin9 にて行った（図 3）。留学生別科生の学修成果発表会に向けて、留学生別科生（26 名）がプレゼンテーションや出身国クイズを用意したが、それらの準備は別科の「総合学習」の時間を利用し、中等教育学科日本語教師養成課程の学生が実習を兼ねて指導し、多くの学生が準備段階から関わった。

イベント当日は、学修成果発表のプレゼンテーション、観客参加型出身国クイズ、観客参加型疑似異文化体験ワークショップを行い、中等教育学科の学生による指導で「うらじゃ」踊りで締めくくり、学部内に在籍する留学生約 20 名、来賓を合わせた学外参加者



図 3 学修成果発表会のチラシ

25 名を含めた 70 名が学内外から出席した。

学部在籍の留学生や準備に関わった日本人学生は、リハーサルや当日の準備段階から別科生の練習を見守り、スマートフォンのアプリを用いた観客参加型クイズに積極的に参加する等、イベントを盛り上げていた。本イベントを外部施設で実施することから、事前に学内一斉メールでの周知に加え、大学HP上での動画告知、RSK の情報番組に留学生別科生が出演しての開催告知を行い、留学生別科や岡山理科大学を宣伝する良い機会にもなった。また、外部団体が主催するイベントへ誘われるという結果もあり、留学生別科生にとっても良い機会になった。会場での事後アンケートでは、回答者が 16 名と少なかったものの、全てのプログラムに対して評価が高く、記述においても「笑顔にあふれた良い発表会だった」「皆さんが楽しく勉強していることが分かった」「とても楽しかった」「良い機会だった」という肯定的な意見が多く寄せられた。

本取組は、留学生別科生と日本人・留学生に限らず学部学生が共にイベント準備を進める中で日常的な交流を持つ機会を作ることを目指した。交流が日常的になることで、双方が交流に積極的になり、学内で行われるイベントへの参加者数を増やすこと、グローバルチャレンジを活用したイベント企画に積極的になることを願って行ったものである。今後はこの成果が学生を動かすものになることを願っている。

5. まとめ

今回行った 2 つの取り組みによって得られた成果は、留学生別科生と学部学生の交流機会が増加したこと、教職・日本語教師を目指す学生に実践の場を提供できたこと、国際交流に関心が低いと思われる学生が参加したことが大きく挙げられる。また、外部施設を使ったイベントを行うことで、RSK や山陽新聞から取材を受け、来賓の参加、外部団体のイベントへの誘いがあったことは、地域との交流にも大きく貢献する結果だったと言えるだろう。数学サポーターのアンケート結果にボランティアでも続けたいと回答があったことは、本取組が



日本人学生にとっても有益なものとして捉えられていると考えられ、教育改革推進事業の予算がなくても継続することが可能であることを示唆している。

今後は、留学生や留学生別科生が日本で生活に溶け込み、困りごとを解決するための支援制度や日本人学生の外国語学習に留学生が寄与するような制度を作ることで、より活発な交流を促進したいと考えている。

参考文献等

岡山理科大学 第II期アクションプラン（中期目標・中期計画）2022-2026. (2022).

<https://www.ous.ac.jp/common/files//651/202204120957280712366.pdf>

岡山理科大学ビジョン 2026(改訂版)。(2021).

<https://www.ous.ac.jp/common/files//651/202204120945260087706.pdf>

【編集後記】

「国際教育研究フォーラム」第104号では小山悦司所長、楊靈林氏、前川洋子所員の3編のエッセイを掲載しました。小山所長は在留外国人がさらに増加する中で、急増する外国ルーツの子どもたちに適切な日本語指導と支援の強化に取り組む、岡山下初の民間団体による「グローバルこどもサポートセンター」の開設は、誰もが暮らしやすい多文化共生の持続可能な地域づくりにつながるのではないかとその意義を述べています。また楊氏は中国で発刊されている国家レベルのSF関連雑誌『世界科幻動態』に注目し、その創刊の背景と中国の読者にどのような情報が配信されているかを紹介し、『世界科幻動態』はSFに関する世界の動きを伝える「メタ的」なメディアとして、言語と文化の壁を越えた架け橋の役割を担っていると述べています。さらに前川所員は別科生を含む留学生と日本人学生との交流をサポートする岡山理科大学グローバルセンターが中心となって行った次の2つの取組みについて報告し、学生たちの交流機会の促進、地域との交流に貢献するなど多くの成果があったと述べています。1つは留学生別科生の数学補習授業を教職志望の学部生や学部留学生が支援する取組みであり、もう1つは岡山市内のイベントホールで実施された留学生別科生の学修成果報告会とその会場を盛り上げる留学生と日本人学生の交流プログラムの取組みです。

今回掲載しました3編のうち、2編は対象が異なりますが、今後留学生を受け入れる上で非常に重要な取組です。また1編は中国のSFに関する内容であり、中国のSFの世界を垣間見ることができます。その意味で、3編とも読み応えのあるものになっており、興味を持って読んで頂けると確信しています。(T.A.)

編集・発行：国際教育研究所
〒710-0821 倉敷市川西町 11-30
加計国際学術交流センター内
TEL (086) 423-1611 (代)
URL : <https://www.kake.ac.jp/iie/>
e-mail : iie@edu.kake.ac.jp